横 浜 市 教 育 委 員 会
臨時会会議録

１　日　　時　　令和６年１月26日（金）午前10時00分

２　場　　所　　市庁舎　18階共用会議室（みなと６・７）

３　出 席 者　　鯉渕教育長　中上委員　森委員　四王天委員　大塚委員　泉委員

４　欠 席 者　　なし

５　議事日程　　別紙のとおり

６　議事次第　　別紙のとおり

教　育　委　員　会　臨　時　会　議　事　日　程

令和６年１月 26 日（金）午前 10 時 00 分

１　会議録の承認

２　一般報告・その他報告事項

「はまっこ留学等体験事業」の実施報告について

令和５年度 横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会の開催報告について

３　審議案件

教委第 47 号議案　令和６年度歳入歳出予算案に関する意見の申出について

教委第 48 号議案　令和５年度一般会計予算案（２月補正）に関する意見の申出について

教委第 49 号議案　横浜市職員定数条例等の一部改正に関する意見の申出について

教委第 50 号議案　横浜市立小学校における草刈り作業中の物損事故に係る損害賠償額の決定に関する意見の申出について

教委第 51 号議案　令和５年度横浜優秀教員表彰に係る被表彰者の決定について

教委第 52 号議案　横浜市学校保健審議会臨時委員の任命について

４　報告案件

教委報第４号　教職員の人事に関する臨時代理報告について

５　その他

［開会時刻：午前10時00分］

鯉渕教育長　ただいまから、教育委員会臨時会を開会いたします。
初めに、会議録の承認を行います。12月15日の会議録の署名者は中上委員と四王天委員です。会議録につきましては、既にお手元に送付してございますが、字句の訂正を除き、承認してよろしいでしょうか。

各委員　＜了　承＞

鯉渕教育長　それでは、承認いたします。字句の訂正がございましたら、後ほど事務局までお伝えください。
なお、１月12日の教育委員会定例会の会議録につきましては、準備中のため、次回以降に承認することといたします。
次に、議事日程に従い、教育次長から一般報告を行います。

木村教育次長　【一般報告】

１　市会関係

教育次長の木村です。それでは、報告いたします。
まず、市会関係ですが、前回の教育委員会定例会から本日までの間についての報告はございません。

２　市教委関係
（１）主な会議等
○１／18　第67回横浜市学校保健大会
○１／19　第103回全国高等学校ラグビーフットボール大会において優勝された桐蔭学園高等学校ラグビー部の選手等による横浜市長表敬訪問
○１／20　上菅田笹の丘小学校新校舎落成式
○１／22　令和５年度　横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会

（２）報告事項
○「はまっこ留学等体験事業」の実施報告について
○令和５年度　横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会の開催報告について

次に、教育委員会関係の主な会議等ですが、１月18日に、「第67回横浜市学校保健大会」が南公会堂で開催され、鯉渕教育長、中上委員が出席し、鯉渕教育長が挨拶いたしました。
１月19日には、「第103回全国高等学校ラグビーフットボール大会」において優勝された、桐蔭学園高等学校ラグビー部の選手、監督、校長が市長を訪問し、鯉渕教育長が同席いたしました。
１月20日に、「上菅田笹の丘小学校新校舎落成式」が行われ、鯉渕教育長が出

席し、挨拶いたしました。
　１月22日には、令和５年度　横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会が、関東学院大学テンネー記念ホールで開催され、鯉渕教育長、森委員、大塚委員が出席し、鯉渕教育長が挨拶しました。また、中上委員、泉委員がオンラインで出席しました。
　次に、報告事項として、この後、所管課から２点報告いたします。まず、１点目ですが、「『はまっこ留学等体験事業』の実施報告について」、２点目ですが、「令和５年度　横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会の開催報告について」、報告いたします。
　私からの報告は以上です。

鯉渕教育長　報告が終了いたしましたが、何か御意見・御質問等ございますか。

中上委員　今の御報告の中の第67回横浜市学校保健大会に出席させていただいたのでその感想と、「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会については、ほかの委員もあると思うのでそのときにその話はしますが、まずは横浜市学校保健大会についての感想です。横浜市学校保健大会は御案内のとおり、各学校で１年間に行った保健体育、学校保健と安全衛生等の取組に対しての表彰で、私が感銘を受けたと言いますか感動したのは、横浜市学校保健優秀学校の横浜市立青葉台中学校の表彰で、学校と家庭と地域が連携した様々な取組を非常に短い中で紹介していただきました。それぞれの取組はなかなか素晴らしく、紹介の中に一つ食育のところがありまして、たまたま今の石川県の被災地のことを重ね合わせて見たのですが、子どもたちが発案した給食で、被災地でのいろいろな簡単レシピを紹介していました。缶詰を使ったり、自分たちが作った動画もあったのですが、非常に楽しんで作っていて、さすが優秀学校だなと感動しましたので御紹介しておきます。以上です。

鯉渕教育長　ほかによろしいでしょうか。
　特になければ次に、「『はまっこ留学等体験事業』の実施報告について」、所管から御報告いたします。

石川学校教育企画部長　学校教育企画部長の石川でございます。今年度初めて実施いたしました「『はまっこ留学等体験事業』の実施報告について」、御報告いたします。詳細は教育課程推進室長から申し上げます。

山本教育課程推進室長　教育課程推進室長の山本です。「『はまっこ留学等体験事業』の実施報告について」、御報告させていただきます。「横浜市中期計画2022～2025」にもありますように、今年度はグローバル教育の充実ということで、今までの英語教育や国際理解教育にとどまらず、グローバルに活躍する人材の育成ということで、今年度取り組んでまいりました。開催日は、令和５年９月16日土曜日、「Yokohama English Quest」として、開催場所は、象の鼻パーク付近で、参加者は、中学校１年生から３年生の82名。内容としましては、ネイティブスピーカーとともに一つのチームになって、英語で会話をしながらチェックポイントを探し歩いて、横浜の良さを再確認するというような取組を行いました。
　また、令和５年11月25日から26日の１泊２日、こちらは、「はまっこ留学体験」としまして、中学校１年生から３年生の19名が参加しました。横浜市内に在

住する海外にルーツを持つ御家庭に１泊２日でホームステイするというような体験活動でございます。こちらについても参加者から、海外留学に興味を持った、関心が高まったというような声も頂いております。

この「Yokohama English Quest」と「はまっこ留学」につきましては、その活動の様子、更には参加した中学生のインタビューなど動画がありますので、この後、視聴していただければと思います。よろしくお願いします。

＜動画視聴＞

今、動画を見ていただきましたが、子どもたちの感想からも非常に効果的ではないかと思われますので、来年度もしっかりと継続していけたらと思っております。報告は以上になります。

鯉渕教育長　説明が終了しましたが、何か御意見・御質問等ございますか。

四王天委員　素晴らしい動画でありがとうございます。私は「Yokohama English Quest」に参加させていただいたのですが、当日は気温が高く、35度ぐらいあってすごく暑い中、山中市長も応援の挨拶に来ていただきました。その中で、やはり日本人はシャイだなという気がして、打ち解けるまでにはなかなか時間がかかるみたいでしたが、だんだん時間がたつにつれて、一つでも二つでも自分の会話が通じると、そこから一気にフレームが外れて、そこからどんどんブレイクスルーが生まれるのだとすごく感じました。実際、日常や常識とは異なるものに触れるというのが、ふだんの座学の授業ではやはり得られないもので、肌で感じることの重要さというのをすごく感じました。実際には謎解きのチェックポイントが分かりづらかったり、自分も回ってみて分からないのもあったのですが、その辺りは運営で整備していただければと思います。

今回は英語だけでしたが、何回も年を重ねていくにつれて、先輩が後輩に「Yokohama English Quest」は良いよと言ってどんどん参加させて、場所も非常に広い場所なので多くの参加が望めるのではないかという期待もありますし、将来的には漢字文化圏、例えば中国語や韓国語などを知らなくても、もしかしたら漢字だけでもコミュニケーションできるななど、そういったところまで、もしかしたら、いろいろな言葉ではなくて体で表現するアフリカの人たちもいたりして、そういった何とかしてコミュニケーションを取ろうとする努力みたいなものまで導き出せれば良いかなと思います。もっと広がる可能性を感じさせる良いプロジェクトだったと思います。ぜひ予算をたくさん取って継続してください。お願いいたします。

鯉渕教育長　ほかに。

森委員　口頭での御説明に加えて映像で見ることによって、当日の雰囲気や子どもたちの表情が見られて、良い事業だったことが伝わってきました。今、動画を見てすごく印象に残ったのが、最初の子どもたちの言葉の中で、一言一句合っているか分かりませんが、「違う人と仲よくなりたい」というような言葉があったり、「でもやっぱり少し不安」という漠然とした不安というのが最初の頃にあったと思います。その後、事前研修というのがはまっこ留学にあって、そこで講師の方がお話しされていた言葉の中で、「どう違うのかな」とか、「はまっこ留学を通して自分を知る」というようなことをお話しされていて、ただはまっこ留学で家

に泊まるだけではなくて、自分の中にあるかもしれない偏見のメガネや違いに着目したところから、いかに同じところもあるということを知ったり、それを通して自分も知るという、事前の研修でそういった研修があったということも今回分かって、それはすごく良いなと思いました。

最後に経験した、これは「Yokohama English Quest」のほうだったかもしれない、どちらか忘れてしまったのですが、終わった後に「思わず体でしゃべっていた」という話があったと思います。これはすごく良い感想だなと思いました。最初は英語で通じるかとか英語で話せるかということがすごく心配だったり、話すことが目的化していたようなところが、やはり仲良くなりたいから伝えたい、その手段として英語をどう使うかというように、その方の中にも変化があったのだと思います。そういったことが１泊２日でも、若しくは１日のYokohama English Questでも経験できる濃密なプログラムであることが伝わってきました。

二つ質問と一つコメントがあります。そもそもこの「はまっこ留学等体験事業」を始めた理由というのを冒頭でお話しいただいたのですが、そこについてもう少しお聞きしたいと思います。第４期横浜市教育振興基本計画にあるグローバル人材の育成という中で、従来の英語教育と国際理解だけではない、国際的に活躍する人材を育成したいと思ってこの事業を行ったというお話がありました。その英語教育と国際理解というところの、従来にはない今回のポイントというのは、話すことと学校の外で交流することの必要性を感じてこの二つになったのかなと思うのですが、なぜこの二つになっていったのかというところをもう一度お聞かせいただけますでしょうか。

山本教育課程推進室長

ありがとうございます。今、御質問いただいた点について、もちろん横浜市としてグローバルで活躍できる人材をしっかり育成していこうという目標はあったのですが、実はこのコロナ禍の中で、こういった直接人と触れ合って体験して、子どもたち自身が何か獲得していくようなことがなかなかできず、学校からも、ふだんの授業だけではなく、コミュニケーション、しかもグローバル人材の育成につながるような機会が本当にないという話を聞いていました。ちょうど新型コロナウイルス感染症も収まってきたこの時期ですので、教育委員会事務局でもこういったことを試行的に進めて、学校又は児童生徒のニーズがしっかりあるということが確認できれば、私たちもしっかりこういう経験を積ませられるようにしてあげて、実際にグローバルに、又は海外留学などそういったことにつながる一つのきっかけづくりができれば良いかなと思って今回始めてみたということになります。

森委員

ありがとうございます。英語に直接触れ合う機会がない、グローバルにつながる機会がないからということで、今回こういった試行をしたということだと思います。「英語を学びなさい」とか「実用英語技能検定を取りなさい」といった、やりなさいという形で学ぶのではなくて、何のために私は学んでいるのだろうというところから学ぶ。それは、日本の中だけで暮らしていると、若しくは学校の中での生活が長いと、その必然性を感じる機会というのが確かに少なかったり、結局、「私は英語を使う仕事に就かないから別に意味がない」と思う方が多いと聞いたりもするのですが、自分の中でそれがしっくりきた上で学ぶことにつながるような機会を増やしていくということなのだろうと理解しました。

もう一つ、はまっこ留学には19名が参加ということですが、何名ぐらいの応募があった上でこの人数になったか教えていただけますか。

山本教育課程推進室長　こちらは初めての取組ではあったのですが、約60名近くの応募がございました。今回は試行ということと予算の関係から20名ぐらいに絞らせていただいたのですが、中学校３年生が最後の機会になるということで優先的に参加できるような形で参加人数を決めさせていただいた経緯がございます。

森委員　今回初めてということで、どれだけ応募があるか分からない中だったと思いますが、もし次回、更にこれを発展していくとするならば、英語を話すことが目的ではないとか、体験することだけが目的ではないということが最初に確認できましたので、子どもたちに応募してもらうタイミングで、自分はその交流を通して何を知りたかったり学びを深めたかったり、自分なりの探究テーマだったりテーマを考えるプロセスなど、その上で応募して臨むというようなプロセスがあっても良いのではないかと思いました。というのも、人数が無制限というわけではないときに、選ばれなかった生徒たちがただ経験できなかったということではなくて、書いたり考えたりしているプロセスの中で、私はなぜ海外の人と触れ合いたいのか、もっと知りたいのかということを深めるプロセスがあることで、より多くの方々が学びを深めたり主体的に学ぶことにつながると思いましたので、来年ももしあれば、そういったことも検討していただければと思います。
　最後に一つ、「Yokohama English Quest」、ミッション型はすごく良いと思いました。遊びながら、何かミッションクリアしながら、楽しい要素があるというのはとても良いなと思いました。ありがとうございます。

鯉渕教育長　ほかにいかがでしょうか。

大塚委員　御報告ありがとうございます。子どもたちの表情が、始まる前と終わったときとでは大きく変わっていました。本当に不安が拭えぬ中で、今まで出会ったことがなかった、自分とはまた違う文化を持った方々との出会いを体験する。そういう体験がいかに子どもの中で豊かなものになっていくか。自分のこれからの人生を語っている子がいましたよね。自分の人生でこういう出会いがまた来るだろう。そういう自分の人生に期待を持つ経験というのは、実に素晴らしいなと思います。これは公立学校だからこそできる取組だと実感しました。予算の問題があるのはよく分かっておりますが、できればたくさんの子どもたちがということを考えますと、先ほど応募の数もありましたが、応募された子どもたちができるだけ参加できるようなものに発展してほしいと思いました。
　あと、ホストファミリーも、１泊２日で安全に生徒をお預かりするというのは本当に責任が重いと思うのです。なおかつ、限られた時間で自分の国の文化に出会ってほしいという、そういう温かい思いを持ったホストファミリーというのを、希望者が増えたときに探していくのはすごく御苦労なことではないかと思うのですが、どのようにホストファミリーを探していかれるのか伺いたいと思います。

山本教育課程推進室長　ありがとうございます。今回の事業は委託して業者に行っていただいたのですが、今回の取組にかかわらず、横浜市内の中で教育に協力していただける、海外につながるような御家庭を探していきながら、業者ともまたいろいろ考えていけたらと思います。先ほどもお話がありましたように、今回の取組は参加する人数が限られているのですが、なるべく多くの子どもたちに参加してもらえるように、今回のこの二つだけではなくて、横浜市では2023ワールドトライアスロン・

パラトライアスロンシリーズ横浜大会のときの日本文化交流ボランティアや、中学校生徒英語弁論大会など、今までも、いろいろグローバルにつながるような取組をしてきましたので、まさに先ほど森委員におっしゃっていただいたように、今後はしっかりと一人ひとりが目的を持って、こういったグローバルの体験などが自分なりに履歴としてしっかり残っていくようなトータルな取組の形にして、横浜らしい教育ということで行っていけたら良いのではないかと思っています。そういう中でまた協力していただける方なども募っていけたらと思っております。

大塚委員　ありがとうございます。多様な子どもたちが横浜市で生活していて、その子どもたちに様々なチャンスが訪れるというのは子どもたちも楽しみにしていることだと思いますので、よろしくお願いいたします。

中上委員　先ほど四王天委員から、「Yokohama English Quest」のご意見の最後のほうに漢字を使ったコミュニケーションの話がありました。私の友達がたまたま一人で世界を旅していまして、そこで知り合った人の家庭に呼ばれたりして、墨汁と筆を持っていって漢字を書いたり折紙で交流するのが一番手軽で、非常に評判が良かったと言うのです。外国人は今、漢字ブームというのもあるのですが、いろいろな交流の仕方があると思います。

それから、「はまっこ留学」ですが、先ほどの御説明で、確かに新型コロナウイルス感染症で海外留学のきっかけがなかったので、それにつながれば良いと思います。それで、「はまっこ留学」というネーミングですが、森委員がおっしゃるように何のためにと考えたら、いろいろなネーミングがあっても良いのではないかと思います。もう一つ大事なのは、ここに「はまっこ」とついていますので横浜市ならではの、先ほどの2023ワールドトライアスロン・パラトライアスロンシリーズ横浜大会もそうですが、いろいろなツールとロケーションがあるんですね。私の体験で言うと、中学校のときの英語の先生が自分のネットワークで、本牧のアメリカンインターナショナルスクールや、根岸の住宅地区の子どもたちとの交流などに連れていってくれました。中区には山手の上に、イギリスの会員制スポーツクラブから発祥しているのですがＹＣ＆ＡＣという、横浜カントリー・アンド・アスレティック・クラブだったかな、それがあって、今はもうアメリカのコミュニティではなくて、会員が少なくなっているので全部開放して、それこそアジアやいろいろな国の人がいるのです。商社や日本の企業にお勤めの人の家族が使用しているのですが、施設もすごく素晴らしくて、ラグビーの公式試合ができるスペックを持っているのですが、非常に良いコミュニティで、日本の子どもたちと交流したいと思っています。そういうところや、ＪＩＣＡ、パシフィコ横浜にあるアメリカ・カナダ連合日本研究センターなどがあり、また、横浜市の区役所には全てではないですが国際交流ラウンジがありますから、都筑区、緑区などに外国の企業の人たちが来ていて、そういう方は日本人と交流したいと思っているわけです。

ベースはいっぱいありますから、予算の都合ということもあるので、トライアルだからここからスタートしたのでしょうけれども、例えば「COOL JAPAN～発掘！かっこいいニッポン～」や「YOUは何しに日本へ？」という番組が私は好きで、日本の良さと交流をうまく行っていますが、ネーミングでも良いのでいろいろな機会を通じて、横浜市のロケーションなりツールを利用して行えば広がっていくと思います。教育だけで行っていくのは大変だと思いますので、ぜひ国際局やにぎわいスポーツ文化局などほかの局と連携して、上手に生のグローバルな体

験ができる機会をぜひ増やしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

鯉渕教育長　御意見ということで。ほかに。

泉委員　私は感想になりますが、映像を見せていただきまして、先に見せていただいた資料を超えて、子どもたちのよく学びを得た様子が分かりました。英語を学ぶということが、テストで高得点を取るために勉強するのではなくて、これからより良く生きていくためのコミュニケーションツールであるということを、こちらが教えるのではなくて体験から主体的に感じている、そんな機会になっているということを強く感じました。本当に貴重な機会だと思いますので、今回は少ない人数ではありましたが、より多くの横浜市の児童生徒たちがこのような体験をできるように、もちろん予算の問題などいろいろあると思いますが、先ほど中上委員がおっしゃられましたように、もう少し連携先など協力者を広げていくような取組がなされると大変良いのではないかと思いました。以上です。

鯉渕教育長　ほかによろしいでしょうか。
それでは続きまして、次に、「令和５年度　横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会の開催報告について」、所管から御報告いたします。

石川学校教育企画部長　学校教育企画部長の石川でございます。先日、令和６年１月22日に実施されました「令和５年度　横浜市教育センター研究発表会「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会の開催報告について」、報告させていただきます。詳細は教育課程推進室長から申し上げます。

山本教育課程推進室長　教育課程推進室長の山本です。引き続きよろしくお願いします。今回１月22日、関東学院大学テンネー記念ホールにおいて、集合とオンラインのハイブリッドで「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」協議会を開催させていただきました。この協議会は今年で２回目になりますが、横浜の教育ＤＸの具体的な方向性について参加者とともに考えていく会ということで、今回は横浜市内に限らず県内のいろいろな自治体の方からも参加がありました。市外では63人のオンライン参加ということで、会場集合が367人、オンラインが310名というような参加になっております。
内容についてですが、まず一つ目は教育員会事務局からの説明で「横浜教育ＤＸを通した授業アップデートと学習支援システムの導入」ということで、今、主体的・対話的で深い学びの実現ということが国からも言われているところですが、そのためにＩＲＴ型学力・学習状況調査の分析結果なども踏まえて、子どもたちの「学力」をどのように伸ばしていったら良いのか、また、そのための授業の在り方についてみんなで考えるような提案をさせていただきました。
また、二つ目は「学校の中で社会情動的コンピテンシーはどう育まれるか」ということで、横浜国立大学の鈴木准教授に御登壇いただき、また、この取組について２年間続けて取り組んでいる南吉田小学校の金子校長にも御登壇いただきながら、２年間の研究成果として、どのように行事や学校の学習以外の面で社会情動的コンピテンシーが育まれるのかといったことや、どのような学級経営・学校経営が社会情動的コンピテンシーを育むことにつながるのかというような研究の実践を発表していただきました。

さらに三つ目としまして、東北大学大学院教授の堀田氏にも横浜市に来ていただいて「これからの時代に必要な学びの変革と教育ＤＸ」ということで、今までどちらかというとＩＣＴや端末をどのように活用するかというような話が中心だったのですが、堀田先生からは、これが子どもの育ちにどのような良い影響を与えるのか、こういったものが学力の向上にどのぐらい価値があるのかというようなお話を頂きました。

最後に、「参会者の感想」をいくつかそこに取り上げているのですが、一つは「教育ＤＸの必要性は社会の変化に伴って必然となっていることがよく伝わりました。次期学習指導要領の実施までに、各教員の意識改革とスキルの習得に関して、積極的に取り組んでいかなければならないと改めて感じた」というような感想や、「ＩＣＴが学力向上につながるのではなく、ＩＣＴを豊かに活用する授業が学力向上につながることを、心に留めたい」や「南吉田小学校の取組が素晴らしい。児童はもちろんのこと教員も達成感があるだろう。このような学校経営をしていきたい」など「授業でも学校行事でも子どもたちにどこまで委ねられるか、その時々の授業で意識していく必要があることを改めて感じた」というような感想も頂いております。

こうした取組をしっかり市内に周知していきながら、ＩＣＴの研修などと併せて横浜市の教育ＤＸが推進していけるように、今後も取り組んでいきたいと考えております。報告は以上になります。

鯉渕教育長　説明が終了しましたが、何か御意見・御質問等ございますか。

大塚委員　御報告ありがとうございます。当日は私も参加させていただきました。この３部構成、まずは教育委員会事務局の説明で「子どもの姿で授業を語ろう」というところは、参加してくださっている学校現場の皆さん方は常日頃そこを大事にして取り組んでいらっしゃるのですが、とにかく一生懸命になり過ぎて、自分の経験では子どもが見えなくなっていって、良い授業をすることが目的になってしまったり、ＩＣＴを活用することが目的になってしまいやすいところがあります。そこを改めて、やはり子どもの姿で授業を語ることで、子どもにとって授業改善というものがいかに効果的なのかということが伝わっていく。そして、それが教育ＤＸを通した授業であるというそのアップデートというのを具体的に語っていただけたと思っています。

２点目の社会情動的コンピテンシーのところの南吉田小学校の取組は、本当にわくわくしながら伺いました。学校行事が子どもの手に委ねられていく。そこにはやはり教職員の共通理解、子どもたちにどんな学校行事を体験させたいか、目標が共有化され、共通理解され、そして子どもたちに任せるという部分では覚悟が必要だったと思います。そういったところを校長が御報告くださいましたが、報告される皆さんの表情や、自校の子どもたちの活動の動画を御覧になる教職員たちの表情がとても柔らかくて、わくわくするような感じがこちらにも伝わってきました。

「『教育を科学』することで子どもの学びの質の向上を図る」という部分では、新型コロナウイルス感染症以降ものすごく学校教育が変革を迫られて、１人１台の端末など、いろいろなことが目まぐるしく変わっています。でも、変わらないなと思うことは、こういった取組は人権が尊重されている学校、学級だからこそできるのだと思います。どの子も安心して自分の思いを出せる。その安心して出せるところに、それを受け止めてくれる仲間がいて、受け止める教職員がいる。そういう大前提が横浜市の学校としてきちんと整っているからこそ、一人ひ

とりがＩＣＴで自分を発信できるし、自分のものを見られたとしても、又は友達のものを自由に他者からの学びというところで見ていく中で学ばせてもらえる。そういった関係性というものが非常に貴重だということも感じました。

南吉田小学校は、実践として運動会を一つの事例として出してくださいました。コロナ禍でできることが一斉にできなくなった。その中で何ができるかということで、教職員たちが知恵を絞って学校行事を様々な形に変えてやり遂げた。それが５類感染症に移行してどう変わって質が高まっていくのかなと思ったのですが、そこで働き方改革と重なる部分で、私としては、学校行事はもっと価値があるのに、働き方改革の部分との均衡というのでしょうか、そこでうまくバランスが取れない状況が発生していないだろうかと感じています。そんな中で、南吉田小学校が運動会をこのような形で取り上げてくださったのは、私にとっては非常に価値があるし、それをまたこういう形で全校種に発信してくださって、行事の中で得られる子どもたちの非認知能力の確かさというものが、データと、教職員の経験や勘、それがタイアップした中で発信されたのは非常にありがたかったし、これをまた全校がどのように受け止めて自分の学校で生かしていくかということを感じました。

最後に、堀田教授のお話は、何でＧＩＧＡスクール構想に取り組むのかというそもそも論から入っていただいて、やはりそこは非常に重要だなと思いました。新しく４月に入ってくる職員も含めて全ての教職員が、なぜＧＩＧＡスクール構想なのかというところできちんと共通理解を図り、その中で子どもたちにはどういう力がつくのか、その学びがどんなに楽しいかということが発信されることは非常に価値があるなと改めて思いました。

よく尋ねられる話題になることということで、前段と最後のところで授業観に課題がある場合など様々な視点をお示しくださいましたが、これらも全て子どもたち一人ひとりが自尊感情を高めながら自分の能力が高められていく、そのツールの一つとしてＩＣＴがあるということが、このお話を伺った方々に伝わっていくのではないかと、そのように自分も実感することができました。たくさんの課題も頂きましたが、これが各学校に広がっていってほしいと思います。

長くなってしまいましたが、あと１点だけ。一つやはり危惧しているのは、現場の状況です。これを伺って「よし」と言ってすぐ取り組める学校と、学校状況の中で人がいない、産休の方が安心してお休みがしにくい、代替が見つからない、保護者とのやり取りが学校の課題になっているなど、様々なものを抱えていらっしゃる学校、それでも前へ進もうと努力していらっしゃる、そんな学校が前に進もうとしたときに、進み方に困難を感じたり方向性が難しいと感じたときに相談できる場所というのは非常に意味があると思います。そこにＩＣＴ支援員なども登場してくると思うのですが、そういった御相談というのはどういうところでしっかり受け止めて行っていただくか、最後にその１点だけお伺いしたいと思います。長くなって申し訳ありませんでした。

山本教育課程推進室長

ありがとうございます。ＩＣＴの推進については今、各学校にＩＣＴ支援員といった形でしっかりサポートができるような形を取っていて、そういった方たちにも相談できるようにはなっていますが、とにかく約500校ある学校の中で、大塚委員がおっしゃるようにいろいろな学校の状況があると思いますので、学校教育事務所だけでなく課を越えてＩＣＴのいろいろな取組の違いについて、横浜市として全部の学校がしっかり推進していけるように相談体制とか、場合によっては私たちだけではなく指導主事も研修に入ったりサポートに入ったりするような体制で、教育委員会事務局としてＩＣＴの推進には努めているところでございま

す。

大塚委員　ありがとうございます。ぜひそこの相談体制の充実もお願いしたいと思います。

森委員　御報告ありがとうございます。私も今回参加して一番印象に残ったのが、子どもに委ねていくというポイントです。子どもたちが自分で理解を深めるために、問いを深めるために、自分を表現するために、どんなツールを使うとそれができるのか、その場面に応じて子どもたちが選べる状況にしていくことが大事だと改めて感じました。

同時に、教職員の皆さんがどのような場面で共同編集をする場面を設定したら良いのか、個人でそれを深めたり、一覧で見せるのが良いのかという場面設定の仕方というのも、ＩＣＴが良いのか、機器を使うのが良いのか、そうでないほうが良いのかというのを、教職員もですけれども選べる状況になることが大事だと思いました。

それを前提に三つほどあるのですが、一つはそういった教育ＤＸが進むためのフェーズの話と、二つ目が４月から始まる端末の持ち帰りや教育ダッシュボードの話、三つ目がＡＩと人ということで、御質問とコメントがそれぞれございます。一つ目の教育ＤＸが進んでいくためのフェーズですが、フェーズ１、２、３という形であると聞いたことがありまして、最初の段階では使い始める。フェーズ２が使い倒す。フェーズ３は、子どもたち自身が使ったり使わなかったりしている状態だと聞いたことがあります。このフェーズに照らし合わせたときに、今、横浜市はどういう状況なのか、どこに課題があるかということを教えていただけますでしょうか。

山本教育課程推進室長　ありがとうございます。この２～３年の新型コロナウイルス感染症のことがあって、まずは端末を使おうというところから始まったわけですが、そこから何年かたった中で、私たちが少し課題に思っていたのが、使うだけではなくて、いかに授業の中で効果的に使えるか。そこに一足飛びに行こうとしていたのが課題だったということを、今回の堀田先生などのお話を聞きながら思いました。今、森委員におっしゃっていただいたように、使うことから始まって、その次のフェーズとしては、それを使い倒すところまで日常使いができて、その後初めて、何が効果的でどこが効果的でないのかということを子ども自身が選んでいけるようなプロセスだったということに今回私たちも気づかされました。使うところから一足飛びに何が効果的なのかということを私たちも学校と話したり情報発信したりしていたのですが、まずはこの後しっかりと日常使いをしながら、ＩＣＴを使い倒していくというところにこれから力を入れていけたらと考えております。

森委員　ありがとうございます。まさにそれが今、必要なフェーズだと思いますし、その先に、どうしたら効果的に使えるかというアイデアや実践をいろいろな教職員同士で共有できると良いと思います。そのためには、先ほどからも話に出ていますように支援の体制というのが大事だと思っております。特に私が危惧しているのは、教育委員会事務局の内側における体制というのが今は不十分なのではないかと思いますので、ぜひ各課の皆さんにも今回の内容を見ていただいて、全ての部署の皆さんがどうしたらそれを前提に支援できるか考えていただきたいと思います。

二つ目ですが、４月から端末の持ち帰りが始まると思います。そうした中で、

例えば教員が宿題を出すというのは、これまでだとドリルやプリントを渡して、子どもたちが解いて、丸つけするのを、御飯を食べる時間を削ったり残業して採点したり、横浜市以外の教員では歩きながらやらざるを得ない状況があるなど、すごく大変だけれども、やはり必要だから宿題を出してきたというところがあったと聞いております。でも、これから端末の持ち帰りがあって、それがクラウド上でどんどんその場で見ることができたりするという状況になっていったときに、大きく変わってくると思います。そうしたときに、教員がそれをどのように確認できるかということも大事だと思います。今回の協議会でも教育ダッシュボードが始まるという話が出ていて、そこでＡＩドリルの確認や、子どもたちの授業アンケートを見ることができるようになると聞いたのですが、そこをもう少しだけ教えていただけますでしょうか。

山本教育課程推進室長

今回、子どもたちや教員の１人１台端末を、先ほど話したようにどのように使い倒していくのかというところでは、ふだんの授業の中だけではなく、そもそも今まで横浜市で行っていた学力・学習状況調査や体力運動能力調査、又は全国のそういったものなども先生方がすぐに見ることができたり、また、子どもたちも自分の健康観察やドリルなど、そういったものがすぐに自分たちで見ることができたりアクセスしたりすることができるように、今、教育ダッシュボードというものを構築しながら、令和６年度には全校で使っていけるように準備を進めているところです。

その中で、今まで学習ドリルというのは、保護者負担であったり、学校によって入れているところと入れていないところがあったり、そもそも端末を持ち帰って家庭でもできるとまた少し違うのかもしれませんが、端末の持ち返りについては慎重に行ってきた部分もあります。今回、横浜市全体としては、はまっ子学習ドリルとデジタル化されたＡＩドリルをその中でできるような形にしました。それは先生方が一つずつ丸つけしなくても、子どもたちが解いて、それで答えが分かるというようなドリルになっておりますので、保護者負担がなくてもそういったものを全市で使えるようにしていく。その上で、保護者からは、ただのデジタルドリルだけでなくＡＩドリルのようなニーズもありますので、そういったものに関して今後どうしていくのかということについては、教育委員会事務局の中でも更に議論を深め、子どもたちがしっかりと使いながら学力が向上できるような仕組みを考えていきたいと思っています。

森委員

ありがとうございます。そういうものがどんどん活用できるようになってくると、これは私がどこかの実践で聞いた話ですが、例えば子どもたちが教科書を何回読んだ、「３回」などと書いて提出するだけの宿題から、何回読んだに加えて、それを読んで更にどんなことを調べたかとか、どのように考えたかということを、皆さんがデータで出してくれているので次の授業の冒頭で一覧化して、その上で最初の１～２分を使って「こういうことをよく深めたね」と価値づけしていくことによって、ただ３回読んだという宿題の方法から、その問いを深めるようなことへ、どんどん宿題の取組が変わっていったという話もあります。それも一覧で見ることができること、しかもその場でみんなで確認できるＩＣＴならではの活用の仕方だと思いますので、ぜひ効果的に使っていただけたらと思います。

最後の点ですが、今、問いを立てる力みたいなお話をしましたが、ＡＩの話も今回の協議会で出ていたと思います。中でも、大学の一般入試をChatGPTに解かせてみたところ、受験者の想定正答率と比べて、数学を除き受験者を上回るかなり

の正答率だったということでした。そうしたときに、どのようなことを人間は学んでいくのだろうかということが、より問われていると思っております。これはぜひ泉委員にお聞きしたいのですが、例えば大学ではＡＩと学びということをどのように考えていらっしゃるのか、そこを踏まえて義務教育の中で人は何を学んだら良いと考えていらっしゃるのか、御意見を聞かせていただけたらと思うのですが、よろしいですか。ありがとうございます。

泉委員　御質問ありがとうございます。大学ですから義務教育とはかなり違って、教え方や学び方もかなり自由度が高いのであまり参考にならないかもしれませんが、現状をお話ししますと、やはり大学でも、試験やレポートもオンラインを用いた方法があります。それも講義をする側の教員の自由ですが、そういう中でレポートを課しても、生成系ＡＩが身近にありまして、学生たちには十分使える知識も技能もあります。私も、従来自分が出題していたような、ある程度幾つかのキーワードを記憶して、意味が分かっていれば書けるような課題を自分でChatGPTに入れてみて答えを見たら、すごくよく書けているのです。なので、これは従来どおりの出題では全然駄目だなと思っています。

そういう中でどうしていこうかなと考えていきますと、これは周りの者ともよく話すのですが、最近は答えが三つ四つぐらいに集約されるものであればＡＩが解けているので、それはもういいだろうと思います。なので、大学も学ぶ内容が変化してきていて、Ｗｅｂで調べて分かるものは自分たちでどんどん調べてもらって、それを複合して、じゃあどうするかというところを教えていくなど、一緒に考えていくようなイメージかと思います。例えば多くの関連事項があって、それが複雑に絡み過ぎてしまっても、これはコンピューターやＡＩでは駄目で、私たちが経験を踏まえて回答を考えていくというものを試験や授業の中で扱うようになってきているかと思います。ＡＩも常に学習をしていってくれているので、ＡＩで調べたことは多分、24時間後にはまた違う答えを出してくるのです。もう既にその24時間でＡＩも学習しているので。ですから、取り締まるなんてことは全然考えていないと思います。

そうやって考えますと、小中学校の段階でそういったＩＣＴ機器に触り始める頃から、こんなことを身につけていってほしいな、時間がかかることなので学び始めてほしいなと思うこととしましては、やはり上手にＩＣＴを活用することの意義。使って良かったというのは、早く終わって良かっただけではなくて、使ったことでより良く分かったとか、すごく分かりやすかったとか、余計なこんなことまで分かったという、良かったなと思えるような経験をたくさんしていってほしいと思います。あとは、学生を見ていますと、私が同じ授業をしていても、iPadを使ってタッチペンでメモをしながら聞いている学生もいれば、スマホで小さい資料を見ながら取り組んでいる学生もいますし、ごく少数ですが、いまだに紙のノートを使っている学生もいます。それは本当に自分が学びたい形で取り組んでくれればよくて、そう考えますと、ＩＣＴを使いこなす力も大切ですが、一方で、どんな使い方が自分に合っているのかというのがだんだん分かってくると、自分にとってより適切な、自分が一番学びやすい学び方というのを選べるのではないかと思っています。

あと、最後はやはり倫理観です。人を傷つけないというのがもちろん大前提ですが、人間として自分の学びを豊かにしたり、真の成長、言い方が抽象的で申し訳ないのですが、本当に人として成長できる、成長を助けられるような武器としてＩＣＴを使うというのがどんなことかということを少しずつ学んでいただけると良いなと思っています。今どきの大学生を見ていると、教員世代よりもよほど

上手に使っていまして、教員が恐れている以上にそんなに大きな不正はしないだろうと思っています。恐らく自分のためにならないということを経験してきている世代ではないかと思っていますので、ぜひそういった感覚を小学校の段階から、中学校の段階からでも積み重ねていっていただけると、その後の成長にもより大きな学びが得られるのではないかと考えています。このような感じでよろしいですか。

森委員　ありがとうございます。

鯉渕教育長　ほかにいかがですか。

中上委員　オンラインで参加したのですが、学校の中での社会情動的コンピテンシーと、最後の講義でお話いただいたこれからの時代の教育ＤＸの２点について少しコメントしたいと思います。

最初の社会情動的コンピテンシーというのを鈴木准教授が継続的にいろいろ研究していらっしゃって、当日私も非常に楽しみに聞いたのですが、学校行事における生徒の主体的な参加と満足度と言いますか、それがいかにコミュニケーションだけでなく生きる力の中で学力とともに大事なツールということで、非常に良い講義だったと思いますし、またこれを継続していただきたいと思います。部活動などはまさに私の経験ですが、高等学校のときに自分たちでたまたま、ＥＳＳという、英会話クラブかと思ったら英会話だけではなくて英語の演劇も行っている部活だったのです。それも自分たちでシスターのところに行って英語の講師をお願いしたり、英語劇のほうも自分たちでシナリオを書いたり、大道具まで全部作ったり、そこに部活動の顧問の先生だけではなくて、いろいろな教科の担任やＯＢ、地域の人たちがみんなサポートしてくれました。私としては非常に楽しかった高校時代でした。

そういうことがまさに社会情動的コンピテンシー、これがこれからの横浜市の一つの強みとしても、まだ研究段階ですが試行して、実際にどんどん学業とともにうまく活用していただきたいと思います。

一つ質問です。「認知能力」、「非認知能力」という言葉はよく分かるのですが、ここでわざわざ「社会情動的コンピテンシー」と、保護者の方や子どもたちに言うときに、逆に「非認知能力」では言えない概念があるから「社会情動的コンピテンシー」を使っているのだと思うのですが、何で「非認知能力」ではなくて「社会情動的コンピテンシー」という言葉なのか。その違いがあったら教えてほしいというのが１点です。２点目は、その答えを聞いてからにします。

山本教育課程推進室長　私たちもこの研究が始まったときには、認知できない能力ということで「非認知能力」というような言い方をしていたのですが、それこそ横浜国立大学の鈴木准教授や、この研究に携わっていただいている専門的な方たちのお話の中では、非認知能力というとあまりにも広過ぎて、こういった協働的な学びや、そういったところで育っていく特定の能力というものを指すためには、社会の中で情動的に働く能力、「社会情動的コンピテンシー」というような言い方のほうがふさわしいということです。専門的な世界の中では、「非認知能力」というのは認知できない能力と言っているのに等しいというようなお話も頂いたので、そういった言い方に変えていったという経緯があります。

中上委員　分かりました。私も昔、人事企画課のときに、政策でよく横文字を使っていた

ので随分職員から反発を受けて、何で横文字ばかり使うのかと言ったのですが、おっしゃるように、概念は日本語で言い切れないところもあると思います。まさに非認知能力が認知されるように、授業にもっとうまく取り入れていただきたいと思います。

それと２点目ですが、この堀田教授については良い講師を選んできたなと思いました。良い講師という意味は、文部科学省の中央教育審議会の部会のメンバーであり、デジタル学習基盤特別委員会の委員長である、まさに最先端の方ですよね。これから国が誘導していこうと言いますか、今の時代を捉えて非常に刺激的な、いろいろなクラウドの概念をうまく分かりやすく講演していただいたと思います。

私の体験からいっても、昨年、中国の景徳鎮市というところに行ってきたのですが、すごくカルチャーショックを受けました。上海市や天津市と並ぶ面積の小さな都市ですが、びっくりしたのは、都市開発のスピードとデジタル化、ＡＩの活用など、パスポートを取るときから全部ＡＩで処理して人手を節約しているのです。ＡＩの良くないところもあって、あまり融通が利かないところもありますが、それにしてもすごく省力化していたり、あと、全部二次元バーコードで行っています。私は小中高一貫校に訪問して日本語学校の授業を見させてもらいましたが、黒板もデジタルの黒板です。日本は遅れているなと本当に思いました。

この教員が冒頭に、Ｇ７の中で日本は、一時経済が危ないと言われたイタリアにも負けたとか、あと、ＯＥＣＤも30位だとか、国力もこのデジタル化の遅れというのが非常にあるし、特に教育委員会事務局などは紙の文化がかなりあって、紙の文化にも良さがあると思うので両方をうまく使っていくのでしょうが、あまりにもデジタル化が遅れているというのが、非常にカルチャーショックを受けました。ですから、堀田教授のクラウドの話を聞いたときも、本当にそういうことだよねと、私たちももっと意識を変えなければいけないと思いました。

とはいえ、横浜市は約500校もあって、やはりスケールデメリットというのがあるわけです。デメリットというのは、経営資源が非常に伴っていない。ヒト・モノ・カネ・情報全部ついてきていません。現場からすると、ＩＣＴ支援員をどうするのか、ついていけない人のノウハウをどうするのか。そういう答えや、あと、持ち帰り端末にしたときに、光と影の話が出てきますよね。ゲームをしたらどうするのか、アダルトコンテンツが見放題になったらどうするのか、誰が管理するのか、費用負担も含めてそういう課題がいろいろあるにしても、ある程度目をつぶりながらでも取り組まないと進まないですよね。先ほど泉委員がおっしゃったように、子どもたちのほうが進んでいますから、やはり私たちがそれに追いついていかないといけないと思います。そういう意味でも刺激を受けた非常に良い講演だったと思います。文部科学省も方針を出すだけではなくて、やはり経営資源、金と人の予算をきちんとつけていただきたいというのが私の意見です。答えは要らないです。

鯉渕教育長　ほかにいかがでしょうか。

泉委員　私は質問ではなくて、また感想ですが、私も協議会にオンラインで参加させていただきました。大変学びの多い協議会であったと思います。特に、先ほどありました「学校の中で社会情動的コンピテンシーはどう育まれるか」という発表の中で、この取組の特徴としましては、学校や先生方の教育実践を同時にデータとして実証していく。多分、同時に行っていくというところがすごく意義のある取組なのではないかと思いました。リアルタイムでデータを見ながら実践していき

ますと、ここはとても効果があったんだということが分かって、先生方のやる気や達成感にもつながると思います。一方で、なかなか効果が上がらない部分についてはどうしたら良いかを考えるような機会になると思いまして、ぜひリアルタイムで子どもたちのデータを取っているという強みを生かした実践を続けていっていただきたいと思いました。

あと、鈴木雅之先生の発表の中で、こんな結果でしたという提示がなされた際に、社会情動的コンピテンシーの高い群と低い群を分けて比較して提示していたと思いますが、あれは多分、平均値より高い半分の群と低い半分の群を比較して、時間でどのように変わっていくかということを示していたと思いますが、見ていて分かるように、もともとそういった社会情動的コンピテンシーが高い群はすぐに効果があります。一方で、もともと低い群というのは変化が遅いです。今回の７月、10月で取った２時点では変わらないか、若しくは下がっているような項目もありました。ですが、このもともと低い群というのは変化が遅いだけであって、これから先生方の取組や学校の姿勢というのがしっかり伝わっていくと、必ずぐんと上がってくると思いますので、ぜひ長期的な視点に立って継続してデータを取っていただきたいですし、この下半分の層にどのような働きかけをすることで上げていくかという、そこを検討していただくことがとても大事で、それが全体の底上げにつながるのではないかと感じました。本当に意義深い協議会に参加させていただきました。ありがとうございました。以上です。

鯉渕教育長　ほかにいかがでしょうか。それでは、今回の研究発表会については以上といたします。

そのほか何か御意見・御質問のある方、どうぞ。

四王天委員　一つ確認したいことがございまして、最近またニュースで気になり始めたのですが、新型コロナウイルス感染症とインフルエンザの感染状況について、今、横浜市がどうなっているかお知らせいただけるとありがたいです。

長田健康教育・食育課長　御質問ありがとうございます。健康教育・食育課長の長田でございます。よろしくお願いいたします。新型コロナウイルス感染症の感染状況でございますが、新規の学級閉鎖数という形で御報告させていただきます。年明けの第３週、１月15日から始まる週のところで２学級、更に１月22日月曜日までの数字で４学級ありまして、１月はトータル６学級という形です。なお、12月は１学級のみでしたので、微増という形でございます。

また、インフルエンザでございますが、１月15日の前の週はなかったのですが、１月15日の週で45学級、１月22日月曜日のみで74学級の学級閉鎖の連絡が来ております。合わせて119学級です。なお、12月の状況から考えますと、12月の中旬は１週間で大体150学級、また、12月下旬になると100学級の新規の学級閉鎖がございましたので、学級数的には少なくなっている傾向でございます。ただ、年明けの状況としては週ごとにちょっと増えている状況でございますので、学校では引き続き基本的な感染症対策ということで、手洗い、そして健康観察、更にCO_2モニターを使った換気ということで、効率的に行っているような状況でございます。

四王天委員　ありがとうございます。ということは、愛知県など、「第10波に入った」と宣言が出るところよりは、それほどまだ感染は拡大していないということですね。ただ、神奈川県自体は大分増えてきているようにも聞いていますので、５類感染

症に移行したことによってどこかで油断があってはいけないというのと、せめて体温測定だけは毎朝義務づけるようになど、これからの感染拡大につながらないようにしていただきたいと思います。あっという間に感染拡大していくような嫌な予感がしているので、その辺りのところも気を引き締める通達みたいなものを更に一度していただけたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

長田健康教育・食育課長　ありがとうございます。例年、年明けのところは感染症が広まる傾向でございます。既に教育委員会事務局としては冬季休業に入る前に、年明け後の感染症について注意喚起をしておりますので、また今後の推移を見ながら学校には働きかけをさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

四王天委員　あともう一つ、以前、新型コロナウイルス感染症が大流行したときは、インフルエンザがぱたっと止むというような極端な傾向があったのが、今年は双方そろい踏みみたいな形になっているところもあるので、そのところも医療的見解、医師からもどうしてこんな感じなのかということも聞いて、教えていただけると良いかと思います。両並びになってしまっているので、よろしくお願いいたします。

鯉渕教育長　御意見ということで。ほかによろしいでしょうか。
ほかに御意見等がなければ、次に議事日程に従い、審議案件及び報告案件に移ります。
まず、会議の非公開について、お諮りします。教委第47号議案「令和６年度歳入歳出予算案に関する意見の申出について」、教委第48号議案「令和５年度一般会計予算案（２月補正）に関する意見の申出について」、教委第49号議案「横浜市職員定数条例等の一部改正に関する意見の申出について」、教委第50号議案「横浜市立小学校における草刈り作業中の物損事故に係る損害賠償額の決定に関する意見の申出について」は、議会の審議案件のため、教委第51号議案「令和５年度横浜優秀教員表彰に係る被表彰者の決定について」、教委第52号議案「横浜市学校保健審議会臨時委員の任命について」、教委報第４号「教職員の人事に関する臨時代理報告について」は、人事案件のため、非公開としてよろしいでしょうか。

各委員　＜了　承＞

鯉渕教育長　それでは、教委第47号議案から教委第52号議案及び教委報第４号は、非公開といたします。審議に入る前に、事務局から報告をお願いします。

片山総務課長　次回の教育委員会定例会は、２月21日水曜日の午前10時から開催する予定です。また、次々回の教育委員会定例会は、３月８日金曜日の午前10時から開催する予定です。

鯉渕教育長　皆様、よろしいでしょうか。次回の教育委員会定例会は、２月21日水曜日の午前10時から開催する予定です。また、次々回の教育委員会定例会は、３月８日金曜日の午前10時から開催する予定です。別途、通知いたしますので御確認ください。
次に、非公開案件の審議に入ります。傍聴・報道機関の方は御退席願います。また、関係部長以外の方も退席してください。

＜傍聴人及び関係者以外退出＞

教委第 47 号議案「令和６年度歳入歳出予算案に関する意見の申出について」
（原案のとおり承認）

教委第 48 号議案「令和５年度一般会計予算案（２月補正）に関する意見の申出について」
（原案のとおり承認）

教委第 49 号議案「横浜市職員定数条例等の一部改正に関する意見の申出について」
（原案のとおり承認）

教委第 50 号議案「横浜市立小学校における草刈り作業中の物損事故に係る損害賠償額の決定に関する意見の申出について」
（原案のとおり承認）

教委第 51 号議案「令和５年度横浜優秀教員表彰に係る被表彰者の決定について」
（原案のとおり承認）

教委第 52 号議案「横浜市学校保健審議会臨時委員の任命について」
（原案のとおり承認）

教委報第４号「教職員の人事に関する臨時代理報告について」
（報告のとおり承認）

鯉渕教育長　本日の案件は以上です。これで、本日の教育委員会臨時会を閉会といたします。

［閉会時刻：午後０時26分］